

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要

論 文 題 目

JSL の子どもの自律的なことばの学びの可能性とその支援

—学校生活への「参加」の観点から—

唐木澤 みどり

2009年3月

本「修士論文概要」は、早稲田大学大学院日本語教育研究科へ提出した修士論文「JSLの子どもの自律的なことばの学びの可能性とその支援—学校生活への「参加」の観点から—」の概要をまとめたものである。論文は、第1章から第8章までの8章からなる。第1章から順に概要を述べる。

「第1章 はじめに」では、まず本研究の背景、目的及び本研究の構成を述べた。

本研究の背景としては、現在日本に定住する外国人が増加傾向にあり、家族とともに来日し日本の小中学校へ編入する子どもたちも増加しているが、必要な日本語支援が十分に受けられていないことが挙げられる。特に筆者自身が日本語支援を行う外国人定住者の少ない地域においては顕著である。子どもは母語も含め成長過程にあり、背景や環境も発達や言語習得と結びついており、さまざまな観点から長期的視野に立った支援が求められており、子どもが自律的にことばを学ぶための支援が必要であると考ええる。

研究の目的は、まず先行研究を検討した上で、筆者の日本語支援の実践事例をデータとし、JSLの子どもたちの「ことばの学び」を学校生活への「参加」の観点から分析し、「自律的なことばの学び」の可能性を考察することであり、その支援に関して提言を行うことである。JSLの子どもたちは主に生活の中で日本語や母語を習得していくと考えられ、多くの時間を過ごす学校生活への「参加」を通してことばも学んでいくと考えられる。筆者が捉えることができるのは、学校生活におけるある「ことばの学び」の一部に過ぎないが、限られた時間の中で子どもに寄り添い、その学びに気づきながらサポートしていくための一つの観点を提示することで、支援者が考えるきっかけを提供することは意義あることだと考える。本研究の構成については、本概要で述べるため省略する。

「第2章 先行研究」では、本研究に関連する先行研究を検討し、本研究の位置づけを述べた。最初に、JSLの子どもの「ことばの学び」を検討するにあたって必要となる「子どものことばの発達」の研究から、子どもがことばを獲得する以前からの親しい人々とのやり取りがコミュニケーションの形を取っており、さまざまな発達と関連しながらことば

---

<sup>1</sup> JSLは、“Japanese as a Second Language”の略であり、本来は「第二言語としての日本語」という意味であるが、本研究では、日本語が第三言語、第四言語の場合もあるため、日本語以外の言語背景のある子どもをJSLの子どもと呼ぶことにする。

も発達していくことが明らかになった。特に岡本（1985）<sup>2</sup>における一次的事ことばと二次的事ことばの概念が示唆的であった。また、母語と日本語というバイリンガルの視点も重要であり、バイリンガルの分類、「二言語相互依存の原則」、二言語の使用環境によることばの発達について先行研究を概観した。これらの先行研究から、子どもに関わる言語全体の発達を捉えた適切な支援が重要であることが示唆された。

次に、JSLの子どものための日本語教育の研究を検討した。まず、JSLの子どもの予備教育としての日本語教育実践を取り上げ、その教育の成果と問題点を検討した。さらに、子ども特有の問題を解決していくための支援の視点や、JSLの子どもが在籍する学校と地域や研究機関との連携の重要性などの知見を得た。JSLの子どもが少ない地域においては、人材を含めたリソースが不足しており、連携・協働が困難な場合も多いことが明らかになり、支援には、「日本語教育」の専門性と、「学校教育」の専門性の両方が必要であることが示唆された。「生活の中のことばの学び」という視点から日本語教育以外の領域の研究も取り上げた。

さらに、「自律的なことばの学び」に関する研究を概観した。まず、日本語教育における「自律（的）学習」については、成人の日本語学習者を対象とした研究が多く、学習者自身が学習の目的を定め、計画を立てて実行し、結果を評価できる能力として捉えられており、その育成や教師の役割に関する研究が多いが、「能力」のみならず「意欲」にも注目した研究や、「自律学習」だけでなく「自然習得」や「言語教育」も含めた総合的な視点で捉える必要性を指摘した研究などもある。子どもがこのような「自律（的）学習」を意識的に実行することは困難であるが、「自律的」に「ことばを学ぶ」ことを支援する際には示唆を与えるものである。

「自律性」は、教育心理学の研究では「意欲」と結びついており、「動機づけ」のキーワードとなっていることが明らかになった。また、教育心理学における「自己学習能力」という概念は、日本語教育における「自律（的）学習能力」とほぼ同義であると考えられるが、その概念の再考が行われており、「自律性の前提」や「他者との関係」、「教育以外の可能性」などが指摘されている。このことから、「自律的に学べる環境とは何か」という視点の重要性が浮かび上がった。

教育の視点からの「自律」の研究では、学校教育における「自律的な学び」は、教育という「他律的な」行為に取り込まれながら、「共同規範」を理解する過程での他者との相互

---

<sup>2</sup> 岡本夏木（1985）『ことばと発達』岩波新書

作用を通じて獲得できるものではないかという示唆が得られた。そのためには「なぜ学ぶのか」が必要となる。そこで、学校生活へ「参加」していくことがすなわち「ことばを学ぶ」ことになるのではないかと考えた。

そこで、学校生活へ「参加」していくことが「自律的なことばの学び」とつながる可能性を示唆する研究として、レイブとウェンガー（1993）の「正統的周辺参加」の概念を検討した。実践共同体への「参加」が同時に「学習」であるとする「正統的周辺参加」は、「学習」を「参加の度合いの増加」とみなし、「実践に関わること」が「学習の効率性の条件」とし、「学習のカリキュラム」は「状況に埋め込まれたもの」とあるという。「正統的周辺参加」に関連する日本語教育の研究からは、第二言語である日本語を使って学校生活を送ることが「正統的周辺参加」と考えられること、「教える行為」がある中でも「正統的周辺参加」と同様の状況的な学習が行われる可能性があることなどの示唆が得られた。

以上の先行研究の検討から、本研究の位置づけを行なった。学校生活における「自律的なことばの学び」とは、学校生活への「参加」の中で「自律性」を持って「ことば」を学ぶことであると定義する。そして、JSL の子どもが「自律的にことばを学ぶ環境」に注目し、学校生活への「参加」が「ことばの学び」と深く関連していると捉え、学校生活への「参加」の要件を以下の3点とし、分析、考察の枠組みとした。

1. 情報にアクセスできるか。
2. 参加が認められているか。（実践に参加しているか。）
3. 十分に学ぶ機会が用意されているか。

「第3章 研究方法」では、調査対象者、データ収集方法及び分析方法を述べた。

調査対象者は、筆者がこれまで日本語支援を行ってきた JSL の子ども3名で、フィリピン出身で小学校6年生に編入した M（女子・12歳）、同じくフィリピン出身で小学校3年生に編入した U（男子・8歳）、タイ出身で小学校3年生に編入した N（女子・8歳）である。

データ収集方法は、筆者が日本語支援を行いながら参与観察を行い、「参与観察記録」をデータとして使用した。筆者の参与観察は、日本語支援という実際に JSL の子どもと関わりながら観察したもので、鯨岡（2005）の「関与観察」に近いものであると考える。また、参与観察を補完するデータとして、インフォーマル・インタビューを採用した。

分析方法は、参与観察により得られたデータを基に「エピソード記述」（鯨岡 2005）を援用し、学校生活への「参加」の観点から、「ことばの学び」のエピソードを記述し、分析

を行った。

第4章から第6章までは、JSLの子ども3名のそれぞれの学校生活への「参加」の観点から「ことばの学び」のエピソードを記述し、分析を行った。

「第4章 Mの学校生活への「参加」と「ことば学び」」では、Mが小学校6年生の11月末から日本の学校に編入し、3か月半程度の小学校生活とその後の中学校生活という2つの学校生活に跨る日本語支援を行っているため、Mについては「小学校生活」と「中学校生活」を分けて分析を行った。

小学校生活では、Mは沈黙期の様相で、日本語支援の場以外ではほとんど発話せず、ジェスチャーなどの非言語的な表現もあいまいなものであった。調理実習のエピソードでは、言葉の介在なしで実践に参加できる様子が観察されたが、「ポスターセッション」への参加を支援に関しては、参加への意欲が見られた部分もあったが、実際のポスター発表には十分参加できなかった。

中学校では、中学校生活への「参加」の要件となる「情報へのアクセス」に大きな問題が生じ、日本語支援は「情報へのアクセス」のための支援に多くの時間を割くことになった。次第にM自身が情報にアクセスできない不便さを感じ、徐々に情報へのアクセスに積極的になっていくと共に、まずMの非言語的コミュニケーションが明確化され、徐々に英語に交じり、ささやくような日本語が発せられるようになった。

さらに学校内の友人や教師とも少しずつ関係性が築けるようになるにつれ、参加の幅が広がり、それに伴いことばを通してやり取りする世界が広がった。また、日本語支援者から教科担任に働きかけ、Mが参加可能な実践を共に検討し、協力することで教科学習への部分的な参加の可能性を開拓している。「書くこと」への必要性も認識し、意欲が芽生えた。

しかし、より「参加」を深めるためには、教科学習への参加が重要なポイントとなり、一次的ことば、二次的ことば双方の発達のための支援が必要である。

「第5章 Uの学校生活への「参加」と「ことばの学び」」では、編入当初、Uにとって日本語が本格的な読み書き学習であったことから困難があったことと、Uが学校の決まりを守らないことが原因とされる仲間との衝突が繰り返され、学校のルールを理解し守れるようになることが課題としてあった。つまり、学校生活の実践への参加に問題があり、その支援が必要であった。

仲間とのトラブルに関しては、U の積極的に「参加」したいという意欲が衝突を生んでいると考えられ、「やり取り」や「ルール」を理解することが解決策となり「ことばの学び」となった。また、「図書館見学」と「昆虫図鑑作り」の2つの「書く」活動のエピソードを通して「参加」しているか否かが「ことば」を生み出す際の観点となることが確認され、「参加」と「ことばの学び」との関連が示唆された。また、当初困難であった在籍クラスの国語の授業における「漢字テスト」への参加は、日本語支援でも漢字学習の支援を行いながら、U自身の自律的なことばの学びの支援となった例である。

より「参加」を深めるためには、書きことばを含めた二次的なことばの育成と、教科学習への参加のための支援も引き続き必要であることが課題として分析から得られた。

「第6章 Nの学校生活への「参加」と「ことばの学び」」では、Nは、当初から授業への「参加」意欲を見せ、授業や遊びにおける仲間の発話から学ぶ姿が多く観察された。入り込みの日本語支援を行った算数の授業では、「参加」へのつまずきとしてかけ算九九ができないことが明らかになり、日本語支援において算数担当教師とも相談しながら九九の練習を行うなどの支援を行った結果、九九ができるようになり、算数の授業では発言が多くなり、積極的に参加ができるようになった。日本語の支援だけでなく、「参加」のつまずきを支援することが必要である。しかし、「社会科見学」のエピソードのように、見学に行っても「参加」の意識が低い場合には、日本語支援の場においてもことばを引き出すことができないことから、「算数の授業」の一連のエピソードや「フリーマーケット」のエピソードにおける日本語の発話や伝えようとするための積極的なストラテジー使用と比較し、「参加」が「ことばの学び」の重要なキーワードであることが示唆された。

Nの場合も、書きことばを含めた二次的なことばの育成と、教科学習への参加のための支援も引き続き必要であることが課題として浮かび上がった。

「第7章 考察」では、第2章の先行研究と第4章から第6章までのJSLの子どもたちの学校生活への「参加」と「ことばの学び」に関するエピソードの分析を通して、「自律的なことばの学びの可能性」とその支援について考察した。

まず、学校生活への「参加」の枠組みとして第2章で挙げた「1. 情報にアクセスできるか」、「2. 参加が認められているか（実践に参加しているか）」、「3. 十分に学ぶ機会が用意されているか」の3点から、「参加」とは何かについてデータを基に改めて考察を行っ

た結果、学校生活へ「参加」するためには、「情報へのアクセス」が可能で、役割を持ってその「実践への参加」し、そこに「学びの機会」が用意されていることが必要であることが確認された。

次に「参加」のための「促進要因」と「阻害要因」を検討した結果、JSL の子どもにとって、特に初期の段階では、「日本語」が「阻害要因」となるが、支援者がアクセスの支援を行いながら、学校生活における参加者との関係構築を促すこと、学校と日本語支援者が連携し「参加可能な実践」を見出しそのための支援をすることにより、「情報へのアクセス」、「実践への参加」が可能になり、それによって「学習の機会」が確保されることになると考えられる。

最後に、学校生活への「参加」の支援としての「日本語支援」と「自律的なことばの学び」の関連を考察した結果、「参加」の3つの要件はいずれも「ことばの学び」と関連しており、情報へアクセスし、実践に参加し、「役割」を持つことで、知りたいこと、伝えたいことが生まれ、「わかろうとする」過程において、「学ぶためのリソース」を利用することで、自律的なことばの学びの可能性があることが示唆された。さらに、JSL の子どもの自律的なことばの学びの支援としては、この「参加」の3つの要件について、子どものその時々状況に応じたサポートを行うことであると考えられる。

「第8章 おわりに」では、本研究のまとめを行い、JSL の子どもの自律的なことばの学びのための支援への提言を行なった。

まず、「参加」の3つの観点をまとめ、第4章から第5章のデータ分析した3人のJSL の子どもの「自律的なことばの学び」についての結論を述べた。また、JSL の子どものための日本語支援への提言を行ない、最後に、本研究の問題点と課題を述べた。